

第一部

「父さんの笛」

詩… 小川 淳子
 曲… 平岡 莊太郎
 歌… 長島 和美
 箏… 鎌田 美穂子
 篠笛・能管… あかる 潤

「記憶」「水の音」

— 中島登詩集「遙かなる王国へ」より —
 詩… 中島 登
 曲… 橋川 琢
 歌… 鴨川 太郎
 笛… 西川 浩平
 二十絃箏… 藤川 いずみ

「夢の道」

詩… 木下 幸三
 曲… 高橋 通
 歌… 鈴木 房江
 フルート… 河合 沙樹
 箏… 高橋 澄子
 打物… 高橋 通

「アダジオ」

訳詩… 齋藤 磯雄
 原詩… フランソワ・コペ
 曲… 千秋 次郎
 歌… 関根 恵理子
 第一箏… 重成 礼子
 第二箏… 木村 麻耶

第二部

「俵あむ母」

詩… 中村 洋子
 曲… 野村 祐子
 歌… 石渡 千寿子
 第一箏… 野村 祐子
 第二箏… 野村 哲子
 尺八… 野村 幹人

「波間に消えた恋」

— 琵琶湖伝説より —
 詩… 伊豆 裕子
 曲… 池上 眞吾
 歌… 横山 政美
 箏・胡弓… 池上 眞吾
 十七絃… 光原 大樹

「命」「風の眼」「ばら園」

— 藤井慶子の詩による三つの歌曲 —
 詩… 藤井 慶子
 曲… 増本 伎共子
 歌… 鴨川 太郎
 歌… 伊藤 香代子
 フルート… 澤田 由香
 二十絃箏… 吉村 七重

「遙かなる愛」

詩… 西岡 光秋
 曲… 小森 昭宏
 歌… 青山 恵子
 尺八… 米澤 浩
 箏… 熊沢 栄利子
 打物… 多田 恵子

ごあいさつ

社団法人日本歌曲振興会名誉会員
 中村 綾子

本日はご多忙のところご来場いただきまして、まことに有り難う存じます。

私共の(社)日本歌曲振興会は「美しい日本語と香り高い歌を」をモットーと致しまして、詩人、作曲家、声楽家三部門が互いに協力し合い、新しい日本歌曲の創作と演奏、普及に努めてまいりました。

〈声楽と邦楽器の共演を基本とする、すべてが新作の声楽曲の発表〉という趣旨のもとにスタートしたこの「邦楽器とともに」の演奏会も今年で五回目を迎えることが出来ました。

伝統ある邦楽奏者の皆様方の、ひとかたならぬご協力があったからこそ、このように開催できますことを、私共は感謝しております。

おかげ様でこの会も、年毎により広く知られるようになり、期待の言葉も多く聞かれるようになって参りました。これは主催者にとって大変嬉しいことでございます。

この新作歌曲が世界に広まりますようにとの願いをこめて、演奏させて頂きます。

何卒きびしいご批評と、これからも末永いご支援を賜りたく、心よりお願い申し上げます。

【「第五回邦楽器とともに」実行委員】

中村 綾子 木下 宣子 千秋 次郎 伊藤 香代子
 鴨川 太郎 関根 恵理子 高島 和義 高橋 久美子
 中村 洋子 藤井 慶子 横山 政美 和澤 康代
 森田 澄夫(責任者)

作品解説

「父さんの笛」

箱根の乙女峠の伝説をもとに、モノオペラを書きました。箏と能管と篠笛と女声のおりなす、美しい親子愛の世界です。

〔小川淳子(詩)〕

今まで一度も触れたことのない和楽器に曲を付けてみました。初めての経験ですが、和楽器の温かさに、新たな感慨を感じております。「平岡莊太郎(曲)」「乙女峠の伝説には深い親子の情が感じられます。今回箏と笛の音と共に、この少女の親を思う気持ちが表現できれ

ばと思います。〔長島和美(歌)〕

―中島登詩集『遙かなる王国へ』より― 「記憶」「水の音」

今回歌曲を編むにあたり、中島登氏の詩集『遙かなる王国へ』より「記憶」「水の音」を選びました。詩集全体を通して特に詩と音楽の深い関係があると感じ、作曲に際しては何よりも詩人の伝えたい心と言葉を大切に、詩を支える音楽を書こうと努めました。また二編の詩が笛と箏の響きを求めていると考えたため、編成はバリトン・笛・箏にいたしました。最後に歌曲のため特別に詩の中の言葉を変更してくださいます中島登様、演奏して下さいます鴨川太郎、西川浩平、藤川いずみの各氏、そして関係者の皆様へ、心から厚く御礼申し上げます。〔橋川琢(曲)〕

「夢の道」

〈夢〉は不思議だ。人の心の奥底を映し出す鏡。恐れ、悲しみ、戸惑いを見せてくれる。その反面、希望を託す言葉でもある。平成七年正月十七日未明、明石海峡の地中を震源とした大地震は建物の倒壊や人命の損失をもたらした大規模な災害であった。被害に遭われた方々の心に大きな傷跡を残した。この大地震を経験された詩人は、運命に翻弄される人生を振り返り、仏の教えの中に夢を持って生きる。頂戴した素晴らしい詩に見合った作曲になったかどうか。仏教的な世界と能の世界を参考にして曲作りをした。災害は忘れた頃にやってくる。〔高橋通(曲)〕

「アタジオ」

永井荷風を思わせるような「私」が、日課の散歩の途上で出逢う屋敷、中からは同じ時刻に聞こえてくるピアノ、ひと夏が過ぎる頃にはその音が途絶えて：時間制約のため一部割愛しましたが、ゴシック・ロマンめいたコペの詩を箏歌に託しました。二面の箏は、いわば二段鍵盤クラヴィアといった趣きです。切実ながら世間からは無視され、やがて消えて行く音楽は、生活信条を頑なに守る詩人の心情と共感しあい、それがまた今回の作曲の契機でもあり、僕は幾つかの「記号」を曲中に埋込みました。しかし最終的には、日本語の声にとって心地よい歌曲であってほしいと願っています。〔千秋次郎(曲)〕

「俵あむ母」

作曲の野村さんと話すうちに、母への思いを歌にということになりました。かつての母親たちは多忙でしたが、農作業もある母と遊んだ記憶は少ないのです。それでも冬には俵を編みながら、子どもの喜びそうな昔話をしてくれました。勇気、知恵、思いやりなどの心を育む話を何度もきき、やがて文学好きになりました。振り返ると、この時間は単調な仕事をする母にも楽しい時間だったと思われれます。この幼年時代の幸せをお伝えできたらと存じます。〔中村洋子(詩)〕

「波間に消えた恋」 ―琵琶湖伝説より―

横山さんの故郷、琵琶湖の伝説を題材にしました。湖畔の宿屋の娘が、修行の途中に滞在した若い僧に想いを寄せる、僧侶は妻帯を禁じられているので娘を諦めさせようと難題を持ち出す。「修行中の満月寺に百日間毎夜通いとおしたら、妻を迎えましょう」と約束した。お堂の灯明をたよりに、たらい舟を漕ぎ出して、九十九日間毎夜通い続けたのだが……。あまりにも哀しい恋の結末。琵琶湖周辺に祀られている十一面観音像の慈悲深い面影と重ねあわせて、最終連を創作しました。〔伊豆裕子(詩)〕

―藤井慶子の詩による三つの歌曲― 「命」「風の眼」「ばら園」

かねてから、森田澄夫氏から、この会のために書くよう、お頼まれました。邦楽器のための作品は、いろいろと手がけておりますが、邦楽器伴奏の歌曲というのは、昨年、メゾソプラノの青山恵子氏の委嘱で四曲書いたばかりです。今回は考えるところあって二十絃箏を使ってみました。演奏者に吉村七重さんを迎えることになり、光栄に存じます。フルートの澤田由香さんも現代音楽にも慣れた、新進気鋭の方です。歌のお二人も、「浅茅ヶ宿」以来の知人もいたりして、当日が楽しみです。〔増本伎共子(曲)〕

「遙かなる愛」

人生には人が人を恋うという永遠の課題がある。とくに異性間の恋の正体は複雑な顔をもつて様々な物語を私たちに語りかけてくる。なかでも悲恋は辛く切ない心の叫びをとまなつて人の心に迫って、悲恋の実体こそ、人の世に逢瀬と続いてきた真実の心の命の姿ともいえるだろう。うつくしい童女へむかって投げかけた一言が、ひとりの女性の運命を翻弄する。天皇の言葉信じ、年老いるまでひたすら待ちつづけた女性の純真な真心は、物質文明、科学万能の今日にあっても、もう一度、いや何度でも直視しなければならぬ人間の本当の優しさを教えてくれる。〔西岡光秋(詩)〕